

# ミテ Mi'Te

◆詩と批評◆第151号◆  
2020年◆夏◆季刊

◆ ◆  
南控控 Minami Kuukuu  
北野健治 Kitano Kenji  
高野吾朗 Takano Goro  
イナン・オネル Inan Oener  
樋口良澄 Higuchi Yoshizumi  
ジェフリー・アングルス Jeffrey Angles  
新井高子 Arai Takako  
◆ ◆

・本・

〈テラコッタと詩〉南控控『雲知桃天使千体像』七月堂 (2954 円)

〈詩集〉高野吾朗『日曜日の心中』花乱社 (2200 円)

ジェフリー・アングルス『わたしの日付変更線』思潮社 (2420 円)

新井高子『ベットと織機』未知谷 (2200 円)

〈評論〉樋口良澄『鮎川信夫、橋上の詩学』思潮社 (2970 円)

〈訳詩集〉イナン・オネル訳『アタオル・ペフラモール来日記念詩集』私家版

新井高子編著『東北おんぼ訳 石川啄木のうた』未来社 (1980 円)

Edit. by Jeffrey Angles 『Factory Girls :Selected Poems of Takako Arai』Action Books (18\$)

・お知らせ 1・

アメリカ大使館・公式Web マガジン『アメリカン・ビュー』(<https://amview.japan.usembassy.gov/>)、6月15日号に、新井がエッセイ「輝きの3ヶ月—アイオワ大学国際創作プログラムに参加して」を執筆しました。日英両語で読めます。また、同プログラムの2019年レポートも、アイオワ大学から刊行されました。[https://issuu.com/uiiwp/docs/ar\\_2019\\_pages](https://issuu.com/uiiwp/docs/ar_2019_pages)

・2・

23人の詩人が日替わりで、一年間、コロナの日々を詩で綴るリレーサイト『空気の日記』(編集・松田朋春)が、4月に立ち上がりました (<https://spinner.fun/diary/>)。新井も執筆しています。朝日新聞文化面(5/24)、毎日新聞コラム「あした天気になあれ」(5/26)等で、紹介されました。

・3・

大学間連携詩誌『インカレポエトリ 第3号』は、9月刊行予定です。七月堂から、その学生による詩集シリーズ「インカレポエトリ叢書」も始まりました。七月堂特設サイトの「著者アンケート」も、楽しいです。詳しい情報は、<https://twitter.com/incollepoetry>

・4・

樋口良澄が、吉見俊哉著『五輪と戦後』(河出書房新社)の書評として、「根源的な戦後日本社会論」を「週刊読書人」(7月10日号掲載予定)に執筆しました。

・5・

イエール大学の日本詩歌の研究会に、新井がZoomでゲスト出演しました(5/1)。

・6・

詳しいお知らせ等はミテのサイトをご覧ください。<http://www.mi-te-press.net/> (毎月20日頃更新)

【後記】南控控さんに詩の寄稿をお願いしました。北野健治さんの連載「筆に倣いて」は、今号が区切りです。足掛け13年間、全50回の執筆、ありがとうございました。

編集: 新井高子 / 発行所: ミテ・プレス / 発行日: 2020年6月30日(火)

寄付を随時受け付けております。郵便局口座: 10090-74894051 名称)ミテノカイ

E-mail: [mite@ace.ocn.ne.jp](mailto:mite@ace.ocn.ne.jp)

「ソレデハミナサマ、ゴキゲンヨウ。」

## コロコニ

南 控 控

懐かしい手紙が届いた

封書の中は乾いた落コロコニの葉に

一行十一文字

スウィウヌカラアンロー

また会おう（さようなら）だけの手紙

スウィウヌカラ

少年期の思い出の人

石狩の海に近い村で生まれ育ち

その事情はだれも知らなかったが

小学校四年生の夏から初冬

新宿落合の我が母校に通った

又三郎のように不思議な転校生

スウィウヌカラ スウィウヌカラ

背は低いががちり眉毛が太く

澄んだ眸は茶褐色で深かった

寡黙で静かな空気をまとっていた

ひょうきんなワル餓鬼のジュンには

口笛朗々と吹いて聴かせていた

学校は休みがちだったが

いつとはなく給食のころになると

風のように桜の門を入ってくる

昼休みはどこかで寝転んで

午後の教室では食い入るように

先生のはなしを聞いていた

運動会の徒競走で

右腕をぐるぐる回しながら

コーナーを高速で走り抜けていた

月クンネネチュプ

クンネネチュプ月の夜のこと

グルグルグルグル

校庭を自転車で走り回っていた

クンネネチュプクンネネチュプ

月の人 チュボルンクル  
チュボルンクルボ 月の子ども

僕は仲良しのひとりだっただろう  
哲学堂の隅々で遊び  
夕暮れになると 相撲をとった  
ちび同士の四つ相撲だが  
盤石の腰と 強い下手ひねりで  
だいたい負けた  
チュボルンクルボ 月の子ども

満月 チュブシカリの未明  
家出した五年生のマツ子による失火から  
四年生の校舎すべてが燃え落ちたとき  
すぐそばに住んでいた僕は  
姉や弟と 震えながら  
桜の門に隠れるように 立ち竦んでいた  
凄まじい火柱が吠え立て  
昨日までの教室が崩れ落ちた

呆然と立つ人の群れのなかに  
泣きじやくりへたり込む  
クラスのジュンの姿が見えた  
すると スウィウヌカラが  
ジュンのそばに 駆け寄って  
同じ形で うずくまり  
セーターの袖を掴みながら  
ふたりして 燃えさかる校舎を  
見つめていたのだった

胸が締め付けられるようだった  
不思議な感情 神々しかった

そしてほどなく  
彼は スウィウヌカラ アンロー  
コロコニの葉に 一行置いて  
北の海の村に還った

また会おう (さようなら)

アイヌの言葉は札幌の「みんなる」に集う人々に教えられました。  
ありがたく、心よりお礼申し上げます。

## ズーノーシス

ジェフリー・アングルス

風景は観るものではなく  
家畜と家禽を詰め込み  
輝くトタン屋根の下で  
蓄えていく混合容器である  
地形を渡っていく川にも  
稀有な動物が泳いでいる  
すする支流に網を投げ込んで  
釣り上げるのは 必ずしも  
予想したものではない  
そんなことはどうでも良い  
川の流れを何度も向き直して  
かつて 届かなかった所にも届ける

センザンコウ と サイキン  
ニワトリ と ニンゲン  
コウモリ と ネズミ

動物の実りのない後尾から  
見知らぬ猛毒のものが生まれ  
合流させられた川を通して  
私たちの身体の貯水池に運ぶ  
いや 運ぶというより  
跳ね飛ばしてしまふ と  
いったほうがいいだろう  
人類のために都合よく冷えた水は  
なんと冷たくて美味しい  
永遠に流れは絶やさないだろう  
少なくとも 私たちの肺が  
硬く黄色く凍るまで

\* 『ニューヨーク・タイムズ』の記事「How Humanity Unleashed a Flood of New Diseases」(1)  
〇二〇年六月一七日)という記事から声を借りた。

## 棒とマスク

高野吾朗

皆さんの最後の居場所になりたくて こうしてドアを開けて待っています

この青空ですら すでに我々のものではなくなってしまった  
誰もまだ来てはくれないけれど 鍵をかけずに独りでずっと待っています  
どこへ逃げても無駄か 境界線を封鎖したところで無意味か

この青空ですら すでに我々のものではなくなってしまった  
この一本の棒さえ握っていれば 真っ暗闇の中でも全速力で奴を追えます  
どこへ逃げても無駄か 境界線を封鎖したところで無意味か  
境界線の内側でまだ怯えている皆さんの代わりに 私が奴と闘いましょう

この一本の棒さえ握っていれば 真っ暗闇の中でも全速力で奴を追えます  
今なお猛威をふるい続ける あの見えない悪魔の正体は何だ  
境界線の内側でまだ怯えている皆さんの代わりに 私が奴と闘いましょう  
境界の外のあの男に処理は任せて 我々はマスク姿で待機だ

今なお猛威をふるい続ける あの見えない悪魔の正体は何だ  
ただし闘う前に 奴が人間の心の持ち主か否か 尋ねなければいけません  
境界の外のあの男に処理は任せて 我々はマスク姿で待機だ  
人の心を持たぬようなら殺します 持っているようなら殺さずにおきます

ただし闘う前に 奴が人間の心の持ち主か否か 尋ねなければいけません  
彼が悪魔に負ければ我々も破滅だ だがもし彼が勝ったなら  
人の心を持たぬようなら殺します 持っているようなら殺さずにおきます  
まずは英雄扱いし それから狂人扱いして 最後は処刑する

彼が悪魔に負ければ我々も破滅だ だがもし彼が勝ったなら  
尋ねてみたのですが 返答がなかったので この手で撲殺しておきました  
まずは英雄扱いし それから狂人扱いして 最後は処刑する  
これで無制限の静けさです 始めも終わりも忘れて生きることができます

尋ねてみたのですが 返答がなかったので この手で撲殺しておきました  
「代弁者」や「愛国者」を気取るあの男の罪を許してしまうと  
これで無制限の静けさです 始めも終わりも忘れて生きることができます

我々までもが「優生思想」の持ち主のように誤解されてしまう

「代弁者」や「愛国者」を気取るあの男の罪を許してしまうと  
不法滞在は私が罰します とはいえ 死に顔だけは綺麗にしてやりました

我々までもが「優生思想」の持ち主のように誤解されてしまう  
奴の死を泣くものがあるようなら その心の傷も癒してあげるつもりです

不法滞在は私が罰します とはいえ 死に顔だけは綺麗にしてやりました

「殺した」という情報が 根拠なき噂や誤報であったとしても  
奴の死を泣くものがあるようなら その心の傷も癒してあげるつもりです

処刑してやれば あの男もソクラテスになれる 本望だろう

「殺した」という情報が 根拠なき噂や誤報であったとしても  
なぜ皆さんは不法な者を金で雇い 自分の贅沢のための行列に並ばせたり

処刑してやれば あの男もソクラテスになれる 本望だろう  
人の心の有無を調べる私の正直さを疑い 命を狙おうとまでするのですか

なぜ皆さんは不法な者を金で雇い 自分の贅沢のための行列に並ばせたり

見えぬ悪魔の死がもし嘘で 接ぎ木でのみ増える桜のごとく  
人の心の有無を調べる私の正直さを疑い 命を狙おうとまでするのですか

再び悪魔が我々とつながり さらに花を咲かせようとしたら

見えぬ悪魔の死がもし嘘で 接ぎ木でのみ増える桜のごとく  
最大の被害者は私？奴と私は同類？皆さんは人間の心をお持ちなのですか

再び悪魔が我々とつながり さらに花を咲かせようとしたら  
奴が無言で「心はある」と答えたのを まさか棒が誤読したのでしょうか

最大の被害者は私？奴と私は同類？皆さんは人間の心をお持ちなのですか

その場合は 処刑後にあの男の血を皆で舐め その傷を耕し  
奴が無言で「心はある」と答えたのを まさか棒が誤読したのでしょうか

それを免疫に 善も悪も忘れて 無の境地にしばし溺れよう

その場合は 処刑後にあの男の血を皆で舐め その傷を耕し  
皆さんの最後の居場所になりたくて こうしてドアを開けて待っています

それを免疫に 善も悪も忘れて 無の境地にしばし溺れよう  
誰もまだ来てはくれないけれど 鍵をかけずに独りでずっと待っています

来なくもいい！ まさ江の七回忌に、お前なんぞ来なくもいい！ 他人の垢付き、しやあしやあと着るモンなんか！

烈火のごとく怒ったのは、祖母でした。先立つた娘、ええ、わたしの母の法要に、手を合わすなと。絹のきものを着ていきたい、うす鼠のちようどいいのを、セコハンで見つけたからと、むしろ無邪気に電話すりやア。

一度か二度しか、通されておらんがしよう、その袖は。丈も幅も、わたしのために仕立てたようじやありませんか。淡い色合いなんぞ、ようようと隔たつた喪の年月で、お値ごろで。大事にしまつてあつたげですよ、鼻曲がりな樟脳臭さが。三日間も干しやア、とれるさねえ。なあの、不足のあろうやと、浅草で幾枚かの紙幣、バわたして。

行きますとも。着て行きますとも。九十歳近い婆さんに仕切らいて堪まるかい。じつの母者の供養だ。すみからすみまで揮発ふいて、垢抜いて、白檀の香袋をひと月吸わして。麻の白襦袢に羽織つたその日は、蓮の紋紗の黒帯でみずからの肝ツ玉まで締め上げまして、サツサと飛び乗りましたよ、里行きのいちばん電車に。

年増女の色気というの、地味めなほうが出るものですよ。衿抜いて、薄紅ひいて、しつかりと眉描きやア、ちらちら、こつちバ見やる男衆のあつたぐらいで。古着のどこが悪イんだ！ ご愛嬌じゃありませんか、チイツと、落ちない袖口の醤油ぐらい、厚塗りで隠したはずの頬つぺたのシミぐらい。来るわけでアねえがんしょう、だれだつて、田舎の法事に、まツサラで。

玄関の戸を開けりやア、懇ろに、引き物の個数バかぞえる、ちえ子義姉さん。茶の間へ上がれば、その祖母が、案の定、デンと座つてこつちバ睨み、大馬鹿者の来よつたぞ！ ヤイ、ちえ子、ツツ返せ、乞食女をツツ返せ！

たじろぐ義姉を瞬時に見限り、膝立てる、背なかの曲がつた大年寄が。打たれてやろうと思つたがですよ、わたしは、シミだらげのその平手に。何度だつて叩かいたさねえ、子どもの時分ア。エイヤと寄りくる婆さんに、鼻つき合わせてやつたがですよ、わざわざ腰アかがめで。

ヒツ裂ヒツ裂ヒツ裂ヒツ

数本すうほんきりのその齒はの角ツン

夏衣なつしやういのすそ

ヒツ搔かいて、ヒツ千切ちぎり、

どの顔さげろイ！ 親の法事に、素性のわからん死に皮着込んで。馬の骨だよ！、お前なんか。  
そうして、卓袱台の法茶、衿へ、ブン投げました。

癌で逝っただれかのように

骨と、

皮に

なり果てましたよ、

わたしは

河原で

——だれの子でもなくなつて、

何十年もかけたがですよ、

そういう檻衣で

そういう素姓で

他人の死に皮かぶつて

立つことば、

詩を書くことば、

(Lost & Found 30)

詩人アタオル・ベフラモールの三篇の詩

訳 イナン・オネル

夜の小川へ

黒の夜のように小川は流れていた  
崖の横でくねくねしながら

私はそれを丘から眺めていた  
魂がそれと一緒に流れながら

胸が膨らんでは引いていた  
冷たい月に照らされながら

いかにも自分だけでいっばいだった  
いかにも遠慮なく、裸

その歌は宇宙の悲しい歌だった  
自由を求める捕虜の歌

夜の小川、私の魂の兄弟  
流れていたその境にぶつかりながら

二〇〇二年八月

大西洋との最初の遭遇

今もなお影響が続いている  
大西洋との最初の遭遇の  
それと並ぶ地中海は  
小さな女の子のように見える

信じられないほどの広さで  
岸に寄せる水の塊  
永遠に自分の内側にあり  
そして自分のみを生きる

この偉大さの岸で  
一晩でいいから過ごしたかった

人間とその寿命の  
境を理解するために

久しぶりに初めて

私の内側で詩が動いた

ということは、私の詩は

この野生の偉大さを求めている

閉じた秋の空の下で

その孤独に泣けたのかもしれない

これまで見たことがあるものの中で

大西洋ほど悲しいものはなかった

私はそれをいつも思いだす

そこで、その永遠の広大さで

自分の心の海に

溺れていく前に

ポルドー、二〇〇三年一月―二月

## にわか雨

ついさつき数粒の雨の滴でした

そしてほのかに感じられる涼しさ

空から見えない手で搾られる

ふと始まった、にわか雨

樹木は土下座でもするかのように

嵐の前で体を曲げた

隣の屋根の上の

一羽のカモメだけ、静かな忍耐で待った

自然は自分の運命に調和して

まるで何かを思い出していた

宇宙の誕生日ほど遠くから

にわか雨がふと始まって、終わった

ちよūdō恋愛のように、人生のように

後ろに孤独を残しながら

イスタンブル・ビュユカダ、二〇〇五年六月

## 青い言葉

北野健治

「アヲハルかよ」

コロナが話題にのぼり始めていた2月中旬、知人たちとの居酒屋での会話。他愛のない内容で盛り上がりつつある最中に、何かのきっかけで、CMで使われている先の言葉を一人が口にした。仲間の一人は、その意味が分からず、「青春」のことだと説明を受ける。

季節に色があると知ったのは、中学生のとき。北原白秋の詩が教材に取り上げられ、作者紹介に絡んできたことだったように思う。中国の五行思想に基づくものだけれど、春Ⅱ青、夏Ⅱ赤、秋Ⅱ白、冬Ⅱ黒とは、絶妙な取り合わせだなあ、と独り感嘆した思い出がある。

「青」は「蒼」とも表記でき、字面でイメージも違ってくるのだけれど、「ブルー」と表記するとまた違う貌を見せる。

仙台出身の少年が、シリアスなジャズプレイヤーになるまでの軌跡を追う漫画『BLUE GIANT』(※①、以下、『ブルー』)シリーズが、この4月に節目を迎えている。

『ブルー』シリーズは、現在2部まで刊行されている。主人公がサックスに目覚め、日本のジャズ界では有数のライブハウスで演奏するまでを描いた『ブルー』。その後、活躍の舞台をヨーロッパに移し、現地でメンバーを集め、カルテットを組み、欧州最大のジャズフェスティバルに出演するまでをまとめた『ブルー SUPREME』がある。そして5月初旬の掲載誌には、次号からアメリカを舞台にした『ブルー EXPLORE』が開始される予告が載っていた。

『ブルー』が凄いのは、音が鳴らない誌面に、ジャズのフレーズを響き渡らせているところ。そのための手法として、重要なシーンには、一切音に関する表記を誌面に取り入れていない。言葉すらも。ただプレイに没頭する彼らとそれに圧倒される聴衆の姿だけを描写する。なのに、音が聴こえてくる。そのフレーズに心を震わされる。

なぜか。それは、常に、今、この瞬間の「音」を追求する主人公たちの日々のエピソードを丁寧に描いているからだろう。だから、読み手は、プレイする彼らの姿に自身の思いをシンクロさせ、震えるのだ。

今年のゴールデンウィークは、例年なら家族で帰郷するところを東京で過ごした。非常事態宣言で、外出もままならないので、いつもよりもテレビを観る機会が多かった。そのため意外な番組を観ることができた。

NHK総合テレビの『となりのシムラ』(※②、以下、『シムラ』)。コロナで他界した志村けん の追悼番組として再放送された『シムラ』は、コントの価値を私に教えてくれた。

『シムラ』を観るまで、私は「コント」について、いわゆるお笑い芸人が、あるシチュエーションを設定したドタバタの短いお笑い劇、それもくだらない内容のものと考えていた。それをこの番組は一変させた。そのことを特に意識させたのが、「死ねない男」(2014年、となりのシムラ製作委員会、『シムラ(1)』収録)。

志村が演じる起業したかつての部下の連帯保証人になった主人公は、借金を背負いビジネスホテルで自殺を図る。スーツ姿でまさに室内で首を吊ろうとしたとき、アクシデントからストラックスの尻が裂けてしまう。死体を発見されたときの不格好さを気にした主人公は、スーツを脱ぎ、ベッドの上にきれいに畳んで置き、改めて椅子に上る。

まさにそのとき、失敗した遺書をゴミ箱に残していることに気づく。やはり死後に失敗した遺書を見られることを気にする主人公は、室外にあったホテルの清掃員のゴミ収集箱に捨てようとして、下着姿のままゴミを持って部屋を出る。ルームキーを持たずに出た主人公は、自動ロックされた部屋から閉め出される。

途方に暮れる主人公の前に、隣室に呼ばれたデリヘル女性の女性が現れる。「死んでしまえ」と罵りながら隣室に消える女性。ほどなく火災警報器の音が館内に鳴り響く。隣室から飛び出し、独り逃げる男性。その後に残された先のデリヘル女性の女性を介助して、主人公もホテルから避難する。

翌日の新聞の社会欄に、「女性を救助」の見出し記事とともに、下着姿の主人公とテリヘリの女性の写真が掲載されている。そのキャプションに「生きていてよかった」の主人公のコメントが一行。そのクローズアップでコントは終わる。

いわゆる「お笑い」はない。たとえてみれば、落語の人情噺。「おかしみ」がある。ペーソスと言えきれないが、それに納まらない人生の滋味が、わずか十数分間の短い時間に濃縮されている。コントとは、こういうものだったのか、という深い感慨が私を襲った。

志村の芸の原点は、ザ・ドリフターズだ。もうそのことを知る人は少なくなつたが、もともとザ・ドリフターズは、バンド演奏の合間に軽演劇を行うグループだった。その先駆者、クレージー・キャッツの後輩の存在。だから、オリジナルメンバーは、楽器の演奏ができた。脱退した荒井注の後任として加入した志村には、一時、キーボードを演奏したこともあるらしいが、その面影はない。ソウルミュージックに造詣が深く、三味線は玄人はだしの腕前だったらしいけれど、バンドマンの意識はなかつたろう。だから、彼はコントにこだわったのでないか。「コント」というバンドで、演奏しようとしたのではないか。

志村の他界後、ある日、ネットニュースで彼の弟子だった人物のエピソードを目にした。7年間の弟子生活の中で2度だけ志村を激怒させた。その一つが、ある日、志村に了解なく、髪の一部を緑色に染めていったときのこと。「その緑色の髪をしてサラリーマンや通行人の役ができるか？ そんなヤツないだろ。(中略)自分がコントに出るときに、そんなリアリティのない髪色にしてふざけてないか」というのが理由だった。(※③)

表現する手段。楽器もあり、肉体もある。表現を「造形」に置き換えてもいい。『ブルーピリオド』(※④)は、油絵をテーマにした漫画だ。

主人公は、要領のいい、ちょい悪の高校生。ふとしたきっかけから、高校二年生まで描いたこととかなかった油絵に目覚め、芸大を目指すことになる。油絵に出会うまでは、学校生活の中で自分を透明人間のように感じていた主人公が、「描く」という行為を通して自分に向き合っていく。その過程で出会う人たちとのエピソードが、彼と彼の絵を成長させていく。

テクニクにも秀でず、美術の知識もない主人公の受験のための武器は、やぼったい言い方だが「情熱」だけ。「描きたい」というストレートな気持ちだが、さまざまな問題を乗り越えさせていく。その姿が、周りの人々を巻き込んでいく。悪友の一人は、あきらめていた夢を叶えるために、進路を変更する。油絵の受験仲間で不合格だった少女は、改めて造形に向き合うため、彫刻に挑む。現在、ストーリーは、芸大に合格した主人公が、受験対策スタイルの絵を捨てて、自身の表現を模索するステージに入っている。

『ブルー』の日本篇の最後のエピソードで、主人公がジャズの手ほどきを受けた師に、海外の修行先を相談する。別れ際、師は主人公に言う。

「…お前、『ブルージャイアント』って知ってるか？ …お前の音なあ、青くなってきたー」(※⑤)

『ブルー』『シムラ』『ブルーピリオド』の3者に共通するのは、主人公の“熱量”だ。その熱が、受け手の心に沁みていく。念いが、高温になればなるほど、炎の色は赤から青に移っていく。能の芸の評価に、誉め言葉として「冷え」がある。それは芸のエッセンスの凝縮と真髄を表す言葉と境地。「青」とは、まさにその謂いだ。

「青」にゴールはない。そのことを胸に、「青い言葉」を求め続けていく。

〈註〉

- ① 著者・石塚真一、発行所・株式会社小学館、「ビッグコミック」連載中
- ② 5月6日放映
- ③ 2020年4月24日 文春オンライン げそ太郎氏コメント
- ④ 著者・山口つばさ、発行所・株式会社講談社、「アフタヌーン」連載中
- ⑤ 『BLUE GIANT』第10巻、「最終話 EAST OF THE SUN」(2017年3月15日発行)

## The Sick Period 2

樋口良澄

## 1 第一次大戦後の文学とパンデミック

前回の原稿を書いたあと、四月七日に「緊急事態宣言」が発動され、首都圏は「不要不急の外出は自粛」となり、経済社会活動の多くの部分が停止した。コロナ禍はよく戦争に例えられるが、静止した街を見ていると、戒厳令下の街とはこうした状態なのか、と思ったりもした。しかし、初夏に向かう空はあくまで輝かしい陽光がきらめき、何事もないかのように微風が吹いている。西脇順二郎が戦争中、詩を発表することができなくなって、多摩川や故郷の村をスケッチしていた時、やはり自然は同じように人智の外にあって輝いていたのだろう、と思った。何点か残されたその絵画には、ただ自然が、人影さえもその一部となつてしまったような自然が、描かれている。しかし、今が戦争下と違うのは、「コロナ禍」と人間が呼ぶ現象も、自然から見れば、大いなるその循環の一面面にすぎないのであろう、ということだ。ウイルスは自然に属するもので、私たちもまたその一部であるのだから。

だが、時代はまさに『スペクトラム』の副題に使われた、The Sick Period (病の時代) に入ったようだ。この「Sick」について、西脇はなぜ副題に選んだのだろうと長年私は考えていた。タイトルの「スペクトラム」は、以前書いたように、一つのものの中にある多様性ということだ。詩集の内容におさわしいし、イギリスでの西脇の状況を考えてよくわかるのだが、これと副題との関係がよく見えない。確かに『スペクトラム』には、前回書いたように、「病い」をめぐる言葉がしばしば登場する。帰国後に「詩人」として文学世界に登場してからの作品より、かなりアナーキーではある。私はこれを通説通り、エリオットの「荒地」がそうであるように、第一次大戦後のヨーロッパの荒廃からさらに若き西脇の疾風怒濤の中での孤独からくるものとこれまで見ていた。しかしコロナ騒ぎの中で、彼の渡英はスペイン風邪のパンデミック直後にあたることから、副題の「Sick」には、象徴的にせよこの病禍の状況は入っていないかったのか、と考えるようになった。

日本でスペイン風邪が激しく流行したのは一九一八年

と一九九年。当時の内地の人口約五五〇〇万人に対し、四〇万近くが死亡している。ハパーセント近くが亡くなったのであり、これは大変なことだ。西脇の全集を当たったが、今のところ文学論やエッセイ、回想を含めスペイン風邪への言及は見当たらない。西脇は一八年、肺浸潤のため故郷で療養し、一九九年上京、外務省嘱託となっている。渡英は二二年。ヨーロッパでは、第一次大戦を戦う兵士を通して病いは拡大したが、戦争下で情報統制があり、パンデミックの情報には抑えられていたと言われている。ロンドンで果たして外国人である西脇の視野に、どこまでパンデミックが入ってきただろうか。

昨年刊行されたエリザベス・アウトカの『ウイルスのモダニズム』は、第一次大戦後の文学がいかにパンデミックの影響を受けていたか、いや、パンデミックの影響として読み換えていく論考で興味深い。

(Viral Modernism, Elizabeth Outka, Columbia University Press, 2019)

アウトカによれば、例えばエリオットの「荒地」では、当時エリオットは体調が悪く、また妻がインフルエンザにかかったこともあり、スペイン風邪罹患の恐怖に襲われていたという。そして、「荒地」の解体された文体はそうした恐怖と関係しているというのだ。アートの含めた当時の芸術表現における混沌や解体が、スペイン風邪流行による精神的混乱に関わっていたと論じる。

疾病と作家の表現との関わりを考察する病跡学という方法があるが、集団的な疾病と表現との関係を研究する試みは、スペイン風邪や今回のコロナ禍のような広範に影響が及ぶ場合、ありえるだろう。病いからの視点で作品を読み換えるのは、読解の新たな可能性を示すだろう。

「荒地」第一部「死者の埋葬」草稿が書かれたのは一九一九年、パンデミックのさなかである。「四月は一番残酷な月」という有名な冒頭の一行も、死と再生のメタファーであるのだが、例えばこの後の

幻の都市

冬の夜明けの鳶いろの霧の下、  
たぐさんの群集がロンドン橋の  
うえを流れていた。

死がこれほど多くの人を滅ぼして

いたとは思ってもいなかった。

(鮎川信夫訳)

という群衆と死をめぐる詩行は、現在のヨーロッパのコロナ禍の映像を見た後で読むと、パンデミックの死者への幻想のようにも見えてくる。第一次大戦後の状況というだけでなく、スペイン風邪による人心の荒廃も「荒地」に関わっていると考える事もできるだろう。

アウトカは、毎回作家の長編インタビューを掲載することでも名高いアメリカの文芸誌「パリスレビュー」電子版の記事で、コロナウイルス蔓延は全く予想していなかったこと、しかしスペイン風邪とコロナウイルスのパンデミックは、恐怖の幻想が実際の病禍を超えて広がる点において似ていると書いている（「いかにパンデミックは文学に浸透したか」）。

How pandemics seep into literature?

(<https://www.theparisreview.org/blog/2020/04/08/how-pandemics-seep-into-literature/>)

第一次大戦後の文学の破壊、混沌は、当時の時代精神が関わっていた。これまで、世界戦争だけが強調されていたが、アウトカの著作によってパンデミックの影響も大きかったことがわかってきた。第一次大戦後の文学がその病跡の中にあると考えれば、それを通して世界を見ていた西脇の「The Sick Period」にも、パンデミックが影を落としていると考えることは可能だ。彼が、意識したかは別として、「パンデミック後」として、世界はあつたからだ。だがスペイン風邪の「パンデミック後」とはどういう状態であったかを文学表現の問題として考えるためには、もう少し現在のコロナ禍がどのように人間の精神や表現に影響を及ぼしていくかを見極める必要があるように思う。

## 2 他者と臨存する、ということ

コロナ禍によって、感染防止のため人との接触を断ち、不急不急のものは可能なかぎりリモート、オンラインでということになった。今私に関係している大学でも、授業は全てオンラインである。これらは「新しい生活様式」と呼ばれ、この方向に事態はどんどん進んでいくようだ。オンラインのデータは保存され、さまざまな用途に利用でき、後からフィードバックできる。非常に便利だ、バンザイ。確かにそのような一面はある。

遠隔教育には通信教育の長い伝統があるが、しかし、今進行しているオンライン化の波はそれとは違うように思う。オンライン授業はデータとして蓄積され、誰もが扱え

るよう定式化され分析され、結局はさらなる効率のため利用される。つまりそれは、効率化、計量化、定型化という、市場（ビジネス）の原理に他ならず、それが教育を覆ったということではないだろうか。コロナ禍によって社会全体の市場化が加速し、教育も例外ではない、ということだろう。オンライン化は市場にもともとあつたもので、コロナ禍がそれを少し速めたに過ぎない。つまり今進んでいるオンライン化は、教育のあり方を問うことから出発したものではなく、おおかた経済の原理によるものだろう。

私は教育の専門家ではないので、教育のあり方からオンラインの問題を論じることなど到底できないが、人と人が直接会うことを今もう一度考えてみたく思う。果たして人と人がその場にいることと、メディアで繋がることとは等価なのだろうか。

このことを考えるために、「共存」という言葉を援用したい。「臨存」という言葉を新たに用いて、私は考えることにしたい。「臨」は目の前にある、という意味で、他者が目の前にいることを指す。「共存」が他者とともにあることを指すならば、他者が目の前にいる関係性を「臨存」と呼ぶことにしよう。

そうすると、今世界的に問われているのは、〈他者と臨存することの意味〉、ということになるのではないだろうか。その意味はどこにあるのだろうか。臨存が必要なのは、例えは医療、教育、そして演劇などのアートでは、他者と臨存するその場で生起するものが重要である。リモートで完全には代置できないものが残る。今代置できるとされているものも、もう一度その詳細を検証する必要があるはずだ。

臨存の意味を考えるために、三年前に亡くなった中村雄二郎が提唱した「臨床の知」を参照する。よく知られているように中村は、普遍主義、客観主義に根ざす「近代科学の知」に対し、「臨床の知」を提言した。近代科学の知の客観主義に対し相互性、普遍主義に対し個別性、論理主義に対し直感的総合性を重視するのが「臨床の知」だ。医療などの現場で個と向き合った時、普遍的な科学の知だけではなく、その場で生起する知を動員し、対処しなければならぬことから「臨床の知」は着想された。近代科学の知が批判的に捉え直された二〇世紀末の知的状況の中で、それは強い喚起力を持ち、臨床心理学、臨床教育学など、さまざまな領域で展開され、現在も成果をあげている（中村雄二郎の「臨床の知」の定義は時期により変化しており、

後期に至るとより「近代の知」を乗り越える概念として用いられ、初期にあった相互性、現場性が、包括的なパフォーマンス、コスモロジーの概念へと展開している。ここには『術語集』(一九八四)の定義による。

この「臨床の知」の三つの要素をふまえると、他者と臨存することでは、次の三点が生起するのではないだろうか。

- 1 現場性Ⅱその場における関係から生まれるもの
- 2 個的具体性Ⅱその場、その時に生起するもの
- 3 身体性もしくは生命性Ⅱ生きられている身体から生まれるもの

これらは数値化されず、定型化もできないから効率的でないということになる。つまり、現在の市場の原理には当てはまらない。しかし、人間一人ひとりの存在、生きられる身体は、この三点において他者との関係の中で展開しているのではないだろうか。

しかし他者と臨存することはいいことばかりではない。他者は脅威でもある。だが他者とは人間にとって本来そうした存在であろう。他者と臨存することの光と影を、市場化を前にもう一度考えなければならぬだろう。

コロナ後の世界は、リモートのデータは市場のために利用され、空間はもとより、未来の時間まで市場化され、個人は剥き出しで市場にさらされる方向に進むだろう。その中でどのように他者と臨存するかを考えることは、市場化されない人間の場所を確保することとして重要になってくるのではないだろうか。

### 3 〈病い〉としての現在

西脇から少し離れ、このように書いてきたのは、私たちの精神がすでにパンデミックの影響を受けているのではないかと思うからである。先に引用したアウトカは、第一次大戦後の作品を読み換え、そこにパンデミックの痕跡を読むが、現在の芸術表現も、後世の人が見たら、その痕跡が読めるだろうと書いていた。今の世界をおおいつくす不安と市場原理への無自覚な没入は、未来の人間が見たら、この時代のパンデミックの痕跡と見えるのではないのか。

最初に戒厳令と書いたが、これまでの戒厳令下では、外部では戦争が行われたり、独裁政権が活動したりする。それは国家が単位だった。しかし今回は、国内の日常生活だ

けでなく、世界的に接触が停止した。これは人類史上初めての経験ではないだろうか。「ひきこもり」とか「巣こもり」という言葉をこれに当てているが、正確ではない。外部も静止しているからだ。ところが、その特異性への考察は見当たらない。国家を超えたコロナ・ウイルスへの対応の動きも、国家においても国際機関においても有効性のある提案さえなされていない。

他者と距離をとるという原則も、ドイツのメルケル首相の「今は距離が他者への思いやりである」という美しい言葉がコロナ蔓延初期に響いたが、しかしそれは反転すると、他者を回避して自己を守る、という行為になる。他者と距離をとることの中に、死をエゴイステイックに回避する企てがあるのだ。これは近代社会が隠蔽してきた〈死〉が露出したということではないか。それに目を瞑り、生(それは市場原理でもある)の側からだけ世界を見るとしたら、それはコロナ禍のもう一つの〈病い〉ではないだろうか。

今からほぼ百年前、詩人が謎のように残した「The Sick Period」という言葉。この言葉を考えることが、私たちの現在に関わる本質的なものに突き当たることに、コロナ禍のおかげで見えてきた。静止した時間の中で、あり得るかもしれない多様な未来の時間を生きることこそ、私たちに今必要なことであり、詩は多分そのことを教えてくれるのである。

新井高子

## 1 災禍の巷で

田口 僕の会社はイカリ消毒株式会社です。イカリは、いつも所長がカンカンになっているからではありません。都会に浮かぶ幸せの船の、そのイカリのように

(中略)

僕たちは、只、害虫を殺しているわけではない。なんのいいこともないこの都会を守っているわけでもない

サブ じゃ、なにを守ってんの(中略)。都会を守っているわけでもないのに、こんなことしたら、趣味かよ

田口 ええと

サブ 小動物殺すサディストかよ

田口 僕の箱庭、あなたの箱庭、いつかいつしよに暮す箱庭、それを守るためでありましょう。

『虹屋敷』冒頭のセリフより、四〇七頁

舞台は、浅草周辺と思われる東京の裏町。ゴム長をはいて側溝を右往左往している作業員は、手に消毒ノソルを持ち、顔には大きなマスク。初演は一九九二年、大幅に二幕を書き直した再演さえて二〇〇二年だが、まるで新型コロナウイルスがはびこる災禍のなかのようでもある。

さらに、その感染に打ちのめされた巷に似て、消毒作業員、キャバレーのホステスなど、町の片隅で働く登場人物たちは、貧窮のなかにある。借金返済に喘ぐ者、金貸しから揺すられている者、すでに自己破産した者……。そのため、リンチまがいの暴力も横行する界限では、男たちの生傷、女たちの悲鳴が絶えない。どれだけ消毒しようが、ドブねずみも減らない。戯曲『虹屋敷』は、唐十郎による「どん底」芝居と言っているだろう。かつて東京の三大貧民街の一つと言われた下谷万年町に生まれ育った唐が、当世の若者群像を通して、新たにそれと向き合った作品。

その上で、唐が問いかけるのは、悲惨に押しつぶされても壊れることのない自己とは何か、破産しても破壊されない財産とは何か。

その問いをめぐって、底へ、底へと謎めきながら旋回していくこの戯曲は、終幕、その解らしきものへたどり着いたとたん、一気に逆回転をはじめ。それまで散りばめられてきた謎めいた断片やセリフの行間がにわかにつながり合い、そのするところ、もうひとつの劇空間を幻として浮上させるの

だ。虹のように。

繰り返しているように、唐十郎の芝居の多くは、一種の変身劇と言えるのだが、本作の斬新さは、終幕の一瞬で、物語じたいにアクロバティックな宙返りをさせること。主人公は消毒作業員の男、「田口」。彼の喜劇的な変装も目を引く芝居ではあるのだが、むしろそれを方便にして、影の主人公の老婆に、極太な抒情の一本線を貫かせる。そして、その思いを梃子に、物語じたいの劇的変身を唐は仕掛ける。

## 2 ねずみの浅知恵

一幕の舞台設定は、歓楽街の裏道に流れているドブ周辺。下水溝に棲み付くねずみを、毒薬を使って駆除する会社「イカリ消毒」に勤める男、「田口」は、同僚の「サブ」にある頼み事している。それは、失踪した職場の先輩、「虹谷」の多額の借金を肩代わりするため、彼の口座に自分の金を振り込む手続き。殺したねずみの死骸は素手で掴むものだと力説し、独自の殺生哲学を論じた虹谷への敬意もあるが、その妹で、キャバレーに勤める娘「かをる」が被る負担金を、田口は軽くしてやりたいのだ。バニー・ガール風な黒レオタードで、長い耳ならぬ、丸い耳を頭に付け、「ねずみのコンパニオン」として働いているキャバ嬢に、彼はソツコン。

しかも、この界限は、はだけた胸や乱れ髪でしばしば女が飛び出してくる危険な町。ヤミ金融もはびこり、恐喝やレイプを屁とも思わぬチンピラ「トンボ」や整理屋「村雨」に牛耳られている。

ところが今月、田口は、肩代わりしたい金額の半分しか入金できなかった。じつは、振込を頼まれたサブが、自分の恋人にその半分の回してしまったのだ。満額を求めて、虹谷の返済をかわりに工面している人物を探しにくるトンボたち……。見かねたかをるは、じぶんの給料袋を田口にさし出すが、借金は到底片付かない。

そこで、彼女は、兄は失踪前に自己破産を準備していたと、田口に打ち明ける。とり立て地獄から逃れるために、兄に代わって申告したいが、それを自分がすると、人生を降参した引け目を兄に負わせてしまうと案じている。惚れた女の苦悶の前で、型破りな妙案を思いつく田口。それならば、自分が虹谷に扮し、なり代わって自己破産を申告すればいい、と。

田口 僕は他人のために自己破産するんです。虹谷さんはもう一人の僕のために自己破産させられてしまっんです。かをる、そうです

かをる そうです

田口 ということは、僕は自己破産しないのです。彼も

自己破産しないのです

かをる え

田口 誰も現実に自己破産したことになりませんが、  
かをる 分りません、田口さん、とても論理的なようです  
が

田口 化けた僕だけが、自己破産するんです(四二八頁)

「化けた僕」、すなわち架空の存在だけが破産を実行するので、虹谷も、田口自身も何ら引け目を追うことにはならないという詭弁。いかにも唐らしいが、劇作家はここで、ほんとうの「現実」を謎かけてもいるのである。書類上の破産は、じつは、人生の深層にはさほど影響しないという底意が潜んでいる。それはやがて別の展開へも繋がっていく。

一幕は、喫茶店が舞台。虹谷にすり代わるため、長髪のカツラを被り、度のきつい眼鏡をかけ、出っ歯の入れ歯をして変装した田口は、その日、裁判所で行われる破産申し立ての審尋の前に、かをると打ち合わせをしている。だが、申告を補助する弁護士やヤミ金融屋の詮索によって、虹谷には隠し不動産の噂があることが浮上。

それは、年の離れた「轟夫人」なる老女と恋仲らしき関係にある虹谷が、その女の豪邸を相続できる立場にあるという噂。万一、ほんとうなら申告は通らない。裁判所での対処を考えているところで、虹谷に金を貸した村雨が乱入。

そして事態が紛糾するなかで、その屋敷の本体にこだわる村雨が、それを見せるなら破産への不服申し立てを取り下げてもいいと迫った矢先、飛び込んだのは、もうひとりの虹谷が現れたという知らせ。田口のウソははれ、それは法の罰則行為だと糾弾する弁護士。すると、すべてを仕掛けたのは、田口の人の良さに付け込んだ自分だと、かをるは言い放つ。

かをる けしかけたのは私です。兄に化け、自己破産の申請をしむけるように。あの方の性格、もろさを計算した上で(中略)。あたしは(中略)、兄に育(はぐ)まれ、兄が殺さずに生かした只一匹のメスねずみ……(中略)。そしていつか笑っていました。人間界のことなどは、破産しても痛くない。兄の代りに誰かを利用してかまわな  
い。それは、私達の敵だから……と (四六一―四二頁)

あちこちにねずみ殺しの罠が仕掛けられた町。だからこそ、  
どれだけ消毒されようが、最も大胆に闊歩していたのは、小賢しい雌ねずみだった。男を騙してなんぼの女。破産なぞ痛くも痒くもない。

不潔なねずみを駆除する清掃業の男が、それゆえ、ねずみ姿のしたたかなキャバ嬢に悩殺され、翻弄される。小動物と

小娘を振ってつなげながら、唐は借金地獄の汚穢の巷へそれらを放ち、ひとりの男に追い掛けさせた。だが、そんな貧者どうしの駆け引きの上に、さらなるどん底の女「轟夫人」の物語がかぶさると、ねずみ娘の浅知恵は、劇の片鱗としてつましく沈んでいく。この娘の何十年か後でもあるような老女の叙情に、飲み込まれてしまうのだ。

### 3 花のような屋敷

自己破産をめぐる前述の展開が、当事者の虹谷を欠いたまま、田口が代理して進行するのと同じように、「轟夫人」もまた、田口や村雨によって語られる耳の世界ばかりにいて、姿は現さない。かわりに、虹谷に変装した田口が、さらにその女を演じてみせるという込み入った方法で、面影だけが喜劇的に引き出される。唐が戯曲に散りばめた断片から、その女の来歴をまとめる。

虹谷と轟夫人のなれ初めは、駅前で倒れていた老婆を、虹谷が介抱して屋敷まで送っていったこと。それから、彼女は年の離れた男を駅で待つようになり、いっしょになったらじぶんの屋敷はともに使える、と……。虹谷の失踪は、金策のこじれだけでなく、二人の婚約指輪を「屋敷の湯舟に落としてしまった」と嘆く夫人の言葉をうけて、探しに出たためでもあった。

そして、その隠し不動産のような屋敷の所在を、金貸しの村雨が追求するなかで、轟夫人とは、戦後まもない浅草フランス座で、額縁ヌードで鳴らした踊り子、「浅草ローズ」のなれの果てらしいことが明らかに。

全盛期の彼女には、東京裁判の戦犯から首相にのし上がった岸信介さえ入れ込んでいたという。黒いキャブタクに乗ってショーを見に来た岸は、ローズとからだの関係を持つとと迫るが、女は見返りを要求。そこで、ある屋敷の前で車を止め、「これをこれから私達の物と致しましょう」。つまり、虹谷の隠し不動産と目される物件は、元首相から贈られたもののようなのだ。

往時のローズが演じたストリップショーを、男の虹谷(じつは出っ歯を付けて変装した田口)が、シユミーズ一枚で踊りながら再現しようとする場面は、男と女、美と醜が攪拌された本作の見せ場の一つだが、彼女と懇意になった失踪前の虹谷当人も、「その屋敷があるかぎり、恐いものはない」と周囲に漏らしていた。

だが、バラのアーチさえあるというその邸宅の構えは、どうも尋常ではない。知らせによって、警察に突き出されたことがわかった虹谷は、二人の指輪を探して、屋根を突き破ることなく空から落ち、湯舟に飛び込んだと言っただから。

田口の変装がばれ、虚偽の破産申請が頓挫し、騒動が静ま  
っていく終幕、虹谷から聞いていたその屋敷の「実体」を、  
出っ歯をはずした男はようやく語り始める。

田口 ゆっくり、しつかり、その輪かくを見せてくる（中  
略）。その朽ちた家の中へ、……先ず、花湯の入り口か  
らのれんをくぐって、なにも破壊することなく、空気がた  
けを突き破り、八両の箱車が、高い空の中に蛇行するレ  
ールの上で轟音上げて駆け降りる。黄色い声音の悲鳴と  
叫び……（中略）。

浅草ローズは、それをもたらったと言いました。駅前で倒  
れていたのを、虹谷さんに抱き起こされ、連れて帰って  
と言いました。そのお屋敷へ。そして、そこで、共に暮  
らそと言いました。その屋敷の湯舟、女湯の深い湯舟に  
は、婚約指輪も眠ってるからと。暮らきれない屋敷に  
困り、兄さん、あの虹谷さんは、それそっくりのお屋敷  
つくってみせました。「ほう、これを眺めていると、こ  
の中を僕らが歩き、寄り添っているようじゃないです  
か」とも言いました。そのお屋敷の、今も台東区のある  
こにあるお屋敷の雛形、模型がここにひっそり眠ってい  
ます（中略）。

ダンカン 言ってくれ、そのお屋敷は（中略）

田口 浅草の

皆 浅草の？

田口 花屋敷

（四六四―四五頁）

風呂敷を開き、テーブルの上に遊園地の模型を置く田口。  
その屋敷とは、浅草・花やしきのことだったのだ。それをじ  
ぶんの邸宅と思ひ込むほど常軌を逸した、老ストリップパーの  
白昼夢。

その遊園地の古めかしいジェットコースターは、実際、作  
り物の下町風景のなかを走る。セリフが描写している通り、  
「花の湯」と看板のある風呂屋のセットは、箱車が通過でき  
るよう、たしかに屋根がない。

#### 4 虹のような屋敷

すると、その夢の切ない叙情のなかで、戯曲は逆回転を始  
める。屋敷にまつわる逸話のすべてが「ウン」だと明かされ  
たことで、セリフのその裏側がせり上がり、遊園地の箱庭の  
向こうに、もう一つの屋敷、もうひとつの物語が立ち上がる  
のだ。

それはおそらくこうだろう。花やしきに隣接する空き地に  
は、段ボールの家があった。一人の老女がそこに住み付いて

いた。皺だらけの顔を覗くと、なかなか彫りが深い。昔は美  
人だったろうと思わせる彼女は、界限の人に「轟夫人」と渾  
名される。

「あのホームレスのばあさん、じつは、額縁ヌードで鳴ら  
した「浅草ローズ」だつてよ」「二世を風靡した女はかえつ  
て惨めだねえ」と囁く人も。噂には尾ひれが付いて、「全盛  
のローズはすごい色気で、戦犯の岸も出獄してすぐ見に来た  
らしいよ」「なかなかジツコンだつたつて」「じゃあ、お屋敷  
の一つももらつたかい？」。

もちろん、岸の妾になつたこと、まして豪邸をもらつたこ  
となどありはしない。シヨールを見に来たのさえホラ話だろう。  
だが、からだを売って稼いだ時代もあつただろう老婆は、世  
間に虐げられていればこそ、すすんでその噂を纏いはじめ  
る。いつしか、「轟夫人」になり切つてしまふのだ。となりの遊  
園地をじぶんの館に見立てて。

「どうとう頭もイカレちゃつたね」「岸にもらつたのは、  
あの花やしきだつてさ」。

ある日、駅前の路上で倒れたものの、きつい臭いのそのか  
らだに関わりとうとする者はなく、清掃業の虹谷は見かねて助  
ける。そして、その紙の家まで送っていくが、「花屋敷でい  
つしよに暮らそ」という老女の思い入れに、むしろ心を動か  
されてしまふ。

落ちぶれ果てた女が、そのどん底でさえ夢を見ている。同  
じように暮らして詰まった虹谷は、だからこそそこに深みを  
見出し、女の夢につき添つてやりたい思いに駆られてしまふ  
のだ。そうして、世話をはじめた男は、指輪がほしいという  
願いをかなえようとする。

終幕、虹谷からビー玉の指輪を受けとる老いたローズのシ  
ルエットが浮かぶとき、テーブルの上の小さな模型に虹がか  
かる。ローズの幸福な心のなかには、さらに美しい七色の花  
咲く屋敷がそびえているだろう。唐十郎は、「虹屋敷」とし  
てそれを宙に浮かばせ、舞台を見つめる観客の目蓋のなかに  
も投射する。

ただし、左記の物語はせりふとしては語られない。唐は、  
このような内容を戯曲の基層に置きつつも、噂や伝聞として  
屋敷があたかも実在するように登場人物たちに騒ぎ立てさ  
せ、しかも最後にウンだと引っくり返すことで、ローズの暮  
らしと心の住いの実体を、暗に、浮かび上がらせたのである。  
火のないところに煙は立たぬというが、唐が試みたのは、  
煙だけを描くことで火を暗示する手法。このようなことばの  
アクロバットとも言うべき離れ業ができる書き手を、わたし  
は他に知らない。せりふという話し言葉が孕む「噂」の力と  
働きを、最大限に利用した戯曲と言つてもいいだろう。

と名乗る面々が、

魚骨 破産しても自己をなくすわけじゃありません。最終的に  
恥骨 なんにも残らないと言われても

魚骨 残している何かを

恥骨 ありますか

(四四三頁)

と問いかける場面がある。金も不動産も、いや借金さえも持ち込めない最終的なじぶんの場所。破産しても、正気を失つてさえも、「残している何か」。物語じたいの変身という妙技で、唐が浮上させた虹色の空中楼阁は、浅草ローズの終の住処と言つてもいいのかもしれない。どれほど零落しようとして、破産することのない最終的な住いを、この女は「じぶんの現実」のなかで握っている。

ローズという名に、画家の棟方志功も入れ込んだという有名なストリップ、ジブシー・ローズが踏まえられているのは言うまでもない。ただし、人気が下火になってからの彼女はアルコール中毒を患い、三三歳で早世している。また、第二次世界大戦中、日本軍が連合国の前線向けに行った謀略宣伝放送の女性ラジオアナウンサーは、アメリカ兵によって「東京ローズ」と渾名されていた。その一人と見なされた日系アメリカ人のアイバ・戸栗は、戦争直後、反逆罪容疑で岸と同様の巣鴨プリズンに収容される。のちに、彼女の名誉回復は図られたが、唐は、その「東京」に対抗して、「浅草」のバラは何かを問いながら、本作を着想した面があつたに違いない。

また、『虹屋敷』の物語から、『ヨコハマメリー』という映画にもなった伊勢佐木町の老娼婦を思い起こす人もあるのではないだろうか。戦後しばらくは米兵相手の誇り高きパンパンとして鳴らした、通称「メリー」の周りには、横浜山手に豪邸があるとか、皇族の末裔であるとか、ガセとわかりきった噂が漂っていた。老いて客が取れなくなつてからは、雑居ビルの廊下に寝泊まりしていたが、行きつけの美容院では最愛の将校にもらった指輪をなくしたと嘆き、しばらくすると、あつたのよ、と嬉しげに口にしたとも。

敗戦後の闇社会を生き、生涯、それを賣いた女が、もはや都市伝説と化した噂を引き受け、虚美の境い目を越えてなり切っていた例は、唐が馴染んだ浅草という花街にも、おそろくあつたに違いない。

## 5 明るい闇

李麗仙に当て書きしていた状況劇場時代の唐十郎は、『あ

れからのジョン・シルバー』ではダンスホールのダンサー、『ベンガルの虎』では戦時中の南洋で働いた娼婦の遺児など、敗戦の闇を引きずる女を数多くものした。当世の東京下町で裏方稼業に就く若者群像を描きつつ、その遠景にかつての女を「影」として際立たせた本作は、唐組の代表作『透明人間』と同じように、いまの若者に「代理」をさせる手法で、唐が追求し続けてきた「焼け跡」を浮かび上がらせたと言つていいだろう。

「焼け跡の空がギリシヤの空よりも青かった」という名セリフのある『あれからのジョン・シルバー』の執筆意図を、当時の唐は「黒澤明監督の映画『酔いどれ天使』にもみられる敗戦直後のあの異様な『明るさ』とは一体何だったのか、それを形而上劇として構成したいと思った」と書いている。「むやみに明るかった闇」とも評されるそれは、居直つて路上に立つたパンパン、米軍キャンプやナイトクラブ、ストリップショーで稼いだ女たちがまず象徴したが、日本研究者のマイケル・ボードダッシュは、その著書『さよならアメリカ、さよならニッポン』で黒澤の『酔いどれ天使』を考察し、身を揺すりながらクラブで情熱的に歌う映画内の笠置シズ子や、肉体の解放と位置づけながら、そのシーンについてこのように分析している。

「笠置による〈ジャングル・ブギー〉のパフォーマンスは脅威をもたらす——抑制の効かない、破壊的な衝動を呼び起こし、松永(新井註、三船敏郎扮する主人公のやんざ)から男らしさを奪おうとするのだ(中略)。占領は国家の去勢につながるというイメージや言説は、この時期、特に男性たちによる作品のなかで、決して珍しいものではなかった」(二八頁)。浅草ローズの屋敷にまつわる逸話のすべてがホラであるなかで、その鼻祖として唐が岸信介を取上げて選び、ストリップパーに接近させたのは、このあたりと繋がっているのではないか。劇中、岸のふりをした金貸しの村雨は、このように語る。

老人 岸です。昭和の妖怪・岸信介と申します。よく通つたフランス座、その頃、彼女……浅草ローズの股の向うに私を置いてけぼりにした時代が世界がほの見えた。まぶしく輝き……と申しても、時代は私を置いていったが遅ればせながら時代にケジメをつけたのも私です。(日米安保条約)を締結したのは、ぼくなんですから(中略)

田口 安保条約取り消して

岸 隠れられるものならばアメリカの傘の下にちぢまろう。そう教えてくれたのはローズ、きみの肩にかかっ

た、今にも落ちそなシユニースが風にそよいだ時だつ

むやみに明るかった闇の女たちのからだは、実際の客が日本の男たちであったとしても、瞳の輝きは太平洋の彼方へ向こうとしていた。だから、その名も、ローズやメリーを引き受けたのだろうか。条約締結を、むしろ言うも愚かに感じている最底辺の女たちの冷めた視線。彼女たちにしてみれば、日本の去勢はとうに済んだこと。さまざまな角度から捉えることのできる日米安保条約に、このように見透かした女たちの視線もなり立ち得ることを、喜劇的なヌードショーを通して唐はさし出したのだと思う。

一九六〇年の反安保闘争のデモに、明治大学の学生だった唐が加わったことは、樋口良澄監督『実験劇場と唐十郎 1958-1962』に詳しい。そして、条約の自然承認によって運動が退潮していくなかで、明大の学生劇団、実験劇場の有志は、現実の生活者に分け入ることを思い立つ。茨城県の農村に向かった彼らは、稲を干す木材と筵で作った仮設舞台で芝居を打つが、そのとき、唐は、かしまった劇場ではなく、こういう形の芝居がやりたかったと周囲に漏らす。

この体験がのちのテント興行の原点の一つになったと樋口は指摘しているが、安保闘争の挫折とその後の試みは、唐にとつて、右翼・左翼の範疇に拘泥せず、できるかぎり地べたに近いところにある攻撃的な視線から、市井を見つめ直すことを気付けせもしたに違いない。その条約と絡めた本作の類縁ショーの場面は、青年期の葛藤が込められた深妙さを孕む。

その唐が演じたのは、借金返済に苦しむ正体不明のバレリーナ「ダンカン」。彼はこう言う。

ダンカン 水が、水であることに耐えられませぬ

白羅 なに

ダンカン 満月が満月であることに

白羅 ちょいまち

ダンカン 毎日が毎日であることに僕が僕であることに、

あんたが、あんたでおさまっていることに

白羅 なにしにきた

ダンカン だから、なにしにきたのか分らないんです

(四二二頁)

もはや存在にも時間にも耐えられない。名も国も営みも持ち物も、ことごとく捨ててしまった恍惚と衰弱の果てで、女の目蓋にほのかに浮かび上がる虹色の屋敷。今に残るのは、あやふやなそれだけ。だが、彼女はそれを握りしめている。あなたにはありますか。唐版・卒塔婆小町を通して、確か

な何かがあると思いつ込んでいる観客に、唐十郎は掃きぶりをかける。『虹屋敷』は、むやみに明るかった闇の女たちへのレクイエムとも言えるだろう。

\*唐十郎戯曲『虹屋敷』(二〇〇二年上演版)

収録は、『唐組熱狂集成』(ジヨルダン株式会社、二〇二二年発行)

\*参考資料

・唐十郎『唐十郎全作品集 第一巻』(冬樹社、一九七九年)

・上坂冬子『東京ローズ―戦時謀略放送の花』(中公文庫、一九九五年)

・紀田順一郎『東京の下層社会』(ちくま学芸文庫、二〇〇〇年)

・井上ひさし/こまつ座編著『浅草フランス座の時間』(文春新書、二〇〇一年)

・DVD『酔いどれ天使』(黒澤明監督、東宝株式会社、二〇〇七年、映画公開一九四八年)

・DVD『ヨロハマメリー』(中村高寛監督、レントラックジャパン、二〇〇七年、映画公開二〇〇五年)

・マイケル・ボーダッシュ著、奥田祐士訳『さよならアメリカ、さよならニッポン―戦後、日本人はどのようにして独自のポピュラー音楽を成立させたか』(白夜書房、二〇一二年)

・樋口良澄監督『実験劇場と唐十郎 1958-1962』(明治大学唐十郎アーカイブ、二〇二〇年)

\*二〇二二年唐組秋公演『虹屋敷』

演出 唐十郎・久保井研

出演 稲荷卓央(田口)、藤井由紀(かをる)、赤松由美(名)

月井護士、岩戸秀年(村雨)、気田睦(サブ)、久保

井研(ダンカン)、辻孝彦(酔客の弁護士・宇都宮)、

土屋真衣(ユリコ)、ほか唐組役者陣